

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 巖 教欽

本論文「能因法師の歌風の研究」は、平安時代中期の歌人能因法師について、その和歌の詠みぶりを中心に考察したものである。提出者巖教欽氏は修士課程在学中から一貫して能因研究に取り組み、本論文では能因の自撰家集『能因法師集』、私撰集『玄々集』、歌学書『能因歌枕』を研究対象とし、能因の歌の詠みぶりや選歌基準、および後世における影響の解明に努めた。能因については残された資料が少なく、関連する研究論文も近年はあまり発表されない状況にある。その中で能因の歌一首一首に真摯に向き合い、表現が共通する歌の数え上げなど、定量的な観点を重視しつつ考察した基礎研究である。

本論文は6章と序論・結論から成り、参考文献と初出一覧、さらに資料編として、『能因歌枕』の「国々の所々名」に挙げた歌枕のうち、『玄々集』、『能因集』、勅撰和歌集所載の歌を挙げた209頁に及ぶ和歌一覧を付す。

以下、章ごとに論文の要旨を述べる。第1章『拾遺集』との重出歌からみた『玄々集』では、能因晩年の撰という『玄々集』所収の全93首について、『拾遺和歌集』との重出歌36首と、その他の重ならない歌に分けて考察し、能因の選歌意識が同時代の勅撰和歌集とどのように重なり合うのかを検討する。伝統的な詠みぶりの歌を評価しつつも、自然詠より人事詠を多く採っている点などを指摘し、各国の歌枕を含む歌を多く選んでいる点も能因自身の旅の遍歴との関連で重要であることを述べる。章末に各歌集への歌人別の入集状況や自然詠・人事詠の分類を示す表を付す。

第2章『玄々集』所収長能詠の撰歌意識においては、『玄々集』に入集する藤原長能の歌について考察する。『袋草紙』には能因が長能に歌の教えを受け、「これより師となす。仍りて玄々集に多く長能が歌を入るるなり」とする説話が残る。実際に長能の歌は『玄々集』において最も多く採られており、同時代の評価として長能の歌が他の歌集にどれだけ採られているかにも注目しつつ、長能詠の表現の特徴を分析する。調査の結果、『玄々集』に採られた長能の歌はそれ以前の撰集には入っていない歌が対象となっており、歌枕に臨場感を持たせた歌を好んで選ぶなど、能因による独自の選歌眼も働いていることを論じる。

第3章「藤原公任に対する認識」においては、能因と藤原公任の関連説話や能因から公任への贈歌などを手がかりに、能因と公任の関係について論じる。公任が『長元歌合』の歌を選ぶ際に、能因の詠と聞くと「入るべからず」と評価を一変させたという『袋草紙』の説話、および公任の歌学書『新撰髓脳』を引きながら、「一すぢにすくよか」な歌を評価する公任の秀歌意識を考察する。『玄々集』所収の公任詠も技巧の少ない素直な詠みぶりの歌が多いことを指摘する。

第4章『能因集』における作歌方法では、編年的に編まれていることにより伝記資料

としての側面も持つ『能因集』の歌について、三代集の読人知らずの歌、『伊勢物語』、紀貫之の影響を具体的に考察する。『古今和歌集』や『拾遺和歌集』の貫之詠との比較においては、歌の分析を通し能因の詠法の特徴として、「題詠を現地詠に変えて読む」、「貫之詠の時点をずらして詠む」、「貫之詠の表現を踏まえて新しい視点を提示する」の三つを挙げる。能因のこのような詠みぶりこそ、『玄々集』の序で自ら掲げた「此道之中興」を体現するものであることを述べる。後世の本歌取りにも通じる重要な側面を論じたものと言えよう。

第5章『能因歌枕』の「国々の所々名」考では、『能因歌枕』所載の「国々の所々名」を概観した上で、そこに挙げられる歌枕と、『玄々集』および『能因集』所収歌の歌枕とを比較検討し、成立の前後関係を推定する。『玄々集』に入集した歌枕54箇所中、「国々の所々名」と一致するのは23箇所、『能因集』の歌枕77箇所中、「国々の所々名」と一致するのは32箇所であるという。その上で、たとえば『能因集』の畿内の歌枕は「国々の所々名」と一致するのが「天河」を詠んだ156番歌までであることから、『能因歌枕』の原型はこの歌が詠まれたと思われる長元7(1034)年頃に成ったのではないかと推定する。『能因歌枕』は増補を経て段階的に成立したと見られており、この問題に一石を投じたと言える。なお、歌枕が古歌の影響を受けて観念として生成される中、能因はあくまでも現地を旅しており、それが能因の「数奇者」評に繋がっている可能性についても議論を深めることが望まれる。

第6章「新古今時代の能因受容の様相」では、『新古今和歌集』における歌枕について考察する。能因は生前に勅撰歌人となることはなかった。『新古今集』に10首入集しているが、能因の死後約150年が経っており、新古今時代の歌人達に評価された点を考察する。

『新古今集』において陸奥の歌枕が増加していることを指摘し、和歌における陸奥への関心の高まりは能因の陸奥下向と詠歌に起因するのではないかと推定する。また、西行と定家の能因受容についても、『山家集』所収の西行の歌や、『定家十体』に撰ばれた能因の歌五首を分析する。審査委員からは、この章については議論が特に性急である旨の注意があった。また、能因と陸奥の歌枕を取り上げるのであれば、修士論文で扱ったという『古今著聞集』所載の「白河関」説話についても改めて考察すべきだったとの意見もあった。

本論文は、能因が詠んだ歌、および選んだ歌の全てを研究対象とし、能因の詠歌手法、選歌眼、歌枕観の関係を明らかにした労作である一方、以下のような問題点も指摘された。巖氏は能因の歌の表現に着目して考察しているが、それは方法としての「詠みぶり」であって、題目に掲げる「歌風」と言えるのかとの疑問が呈された。また、伝統的な歌語や詠法を基に自身の新しい要素を加えるのが能因の詠みぶりであると繰り返し主張されるが、それは程度の差はあれどの歌人においても試みられたことで、能因の独自性をさらに具体的に見出す必要性も指摘された。能因が依拠したと推定する古歌に関して、能因と同時代の伝本および訓みの検討が不十分であるとの意見もあった。ただし、これらの点については本論文全体の価値を損なうものではなく、今後の研究課題とすべきであることが確認された。

以上の審査結果から、本論文は審査委員全員により博士(学術)の学位請求論文として合格と認められた。